

## 社会に還元できる研究を目指して

——河角先生からの宿題——

河原典史

故・河角龍典先生との出会いは、一九九〇年のことと思います。同年に立命館大学文学部へ入学した河角先生は、一部学術研究団体の「地理学研究会」へ入会されました。一九八四年に入学し、当時は文学研究科博士後期課程に進学していた私も、同研究会のOBでした。なので、調査合宿や研究発表会、そしてコンパなどで顔を合わせていたはずですが、残念ながらその記憶は、ほとんどありません。

河角先生との交流の確実な記憶は、一九九一年のことです。当時の日下雅義先生（立命館大学名誉教授）がご担当された出雲地方への地理学調査法の授業です。現在のTA (Teaching Assistant) として参加した私は、二回生で受講していた河角先生の姿をよく覚えています。一緒に受講し、現在では大学や高校で教壇に立つ熱心な三回生に混じって、積極的に議論に加わっていたことが思い出されます。

その後、河角先生の思い出は、下宿での酒席でしょうか。助手として任用されていた一九九五年当時、私は西陣で一人暮らしをしていました。時々拙宅に院生を招いては、議論を交わしていました。河角先生はこの件が非常に印象深かったようで、何人かの地理学系の先生に話していたようです。

最も印象深い河角先生との思い出は、大学院の合同ゼミのことです。二〇〇〇年ころから、サバティカルで海外研究を終えて帰国した教員は、出席している全教員・院生の前で、いわゆる帰朝報告をするようになり

ました。何人かの先生が報告をされましたが、あるとき河角先生が私に問いかけたのです。「どうして調査報告は、スライド写真の紹介でしかないのですか」と。当時、教員のなかで若輩だった私は、河角先生の鋭い質問に答えられませんでした。そして、「私が報告をする時は、河角君に少しでも認めてもらえるような、研究内容を報告する」と返答したので。その後、二〇〇一年度の一年間、私はカナダのブリティッシュ・コロンビア大学への学外研究の機会をいただきました。そして帰国後に、初期の集住地・ステイブストンからバンクーバー島西岸への日本人漁業者の二次移住について報告したのです。報告を終えた私は、同僚である年長の先生方よりも、院生の河角先生からの質問を期待と不安が入り交じった気持ちで待ち構えていました。そんな気を引き締めていた私への河角先生の質問は、次のようなものでした。「カナダへの日本人移民史を調べて、何の役に立つのですか。今後、日本人漁業移民史の研究結果は、どのように活かされるべきなのですか」。先行研究にない新しい史実を実証し、少し浮かれていた私は、河角先生のいう研究貢献までには思いもよらなかったのです。やはり、河角先生には自然地理学をベースとする環境史にご関心があり、後に本学の歴史都市防災センターでの共同研究にご参加されたことから、早くから研究成果の社会還元を心を割っていたに違いありません。

何よりも、河角先生との思い出といえば、一緒に育んできた「京都学」

に関わることです。立命館大学文学部では、二〇〇六年度に文部科学省による大型研究プロジェクトである現代GP (Good Practice) に、『人文学的な地域還元で変わる歴史都市京都』が採択されました。このプログラムの特色は、地域住民と学生がともに学ぶインターシップを含む教養科目群の提供による地域貢献の試行でした。そして、このプログラムを発展させるべく二〇〇八年度に、新たな教学組織として京都学プログラムは一回生を迎えることになったのです。

開設時、すでにデジタル人文学に関する授業を担当されていた河角先生をお迎えして、京都学プログラムはスタートを切りました。京都学プログラム、いわば「立命館京都学」が成長を続けるなか、創設から八五年を迎えた文学部は二〇一二年に大きな変革期を迎えました。開設から四年目の完成年度を迎えた京都学プログラムは、京都学専攻となったのです。その中心として、活躍を期待されたのが河角先生でした。宇多野ユースホテルとのインターシップをはじめ、ここでも河角先生は地域連携を目指した授業展開を試みていました。二〇〇六年度に芽生えた「立命館京都学」は、二〇〇八年度に枝葉を広げ、二〇一二年年度には最

初の花を咲かせました。そして、京都学専攻へと名前を変えてさらに成長したこの教学組織は、二〇一三年三月に一つの実を結んだのです。今後とも次々に大きな花を咲かせ、実を結ぶことを期待するなか、三つ目の実の結びを見届けて、河角先生は天に召されたのです。

歴史時代における自然と人間との関わりをめぐる景観復原研究は、「立命館地理学」の大きな柱の一つです。それを継承しつつも、「立命館京都学」での防災・減災教育をはじめとする社会への啓蒙や、研究成果の還元を目指していた河角先生のご逝去は「立命館地理学」の大きな損失といえましょう。そして、より具体的に地域貢献を目指していた「立命館京都学」は、河角先生が最も活躍できる場所であったに違いありません。院生時代からの河角先生のご指摘に少しでも応えられるよう、日々努めていきたいと思っています。自己満足的な研究に留まっていたならば、どうか天国より叱責して下さいませ。

ご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。